

学長告辞（平成 23 年度卒業式）

平成 23 年度は、その直前の 3 月 11 日に、東日本大震災と巨大な津波に襲われ、福島第一原発の甚大な破損による放射能汚染という、日本のみならず世界に衝撃を与える、そしてこの先長いこと、我々の社会を拘束し続けるであろう出来事がありました。私にとっては、これらの出来事は、さまざまなことを考えさせるきっかけとなりました。皆さんにとっても同様ではなかったか、と思います。改めて人のつながり、絆、ということに、多くの人が言及した年でもありました。

本年度の卒業生、すなわち学士の学位を取得した諸君は、4 学部あわせて 1810 名、大学院の博士前期課程の修了者すなわち修士の学位を取得した諸君は 144 名、博士後期課程を修了して課程博士となられる諸君は 7 名、そして、法科大学院を修了して新たに司法試験に挑戦する諸君は 37 名となります。卒業生、修了生の皆さん、改めておめでとうございます。御父母をはじめ、ご家族の皆様、関係の皆様も、さぞかしお慶びのことと存じます。

昨年度は、大震災の影響を考慮して大学全体の卒業式典を取り止めただけに、ここにこうして学習院長、桜友会長、父母会長をはじめ、来賓各位のご臨席を賜るなかで、式典を挙げていくことを、心よりうれしく思います。またこの式典には、卒業後 30 周年、40 周年、50 周年、60 周年を迎えられた、今年度卒業する諸君から見れば大先輩にあたる卒業生代表の皆さんにも、ご列席いただいております。感謝申し上げます。

人のつながり、ということを先ほど申し上げました。学習院大学の卒業生たちと、現役学生たちとの、さまざまな場でのつながりがたいへん豊かであることは、私ども教職員としてもたいへんうれしいことであり、ありがたいことと思っています。学生たちの各種の部活動における指導や援助は、その良い一例と言えるでしょう。

今回卒業する学部生のうち 7 割がたの諸君が、就職活動を控えた昨年 3 年生の冬に、2 日間みっちり、キャリアセンターのもとで、面接対策セミナーを受けたはずですが、その際に、ボランティアで講師役を務めてくださった 250 名にもものぼる先輩たちと接するなかで、社会において働くことの意味を考える良いきっかけが得られたことと思います。受けた恩義はしっかり忘れず、今度は卒業した皆さんが、バトンタッチをして行ってほしいと思います。その面接対策セミナーで、先輩から皆さんへ贈られたメッセージを、皆さんは憶えているでしょうか。「私がやります」という言葉ですね。上からの指令を待つのではなくて、あるいは人から言われて動くのではなくて、現実を自分の目で捉えてプラスとなるように自ら率先して動く、そういう積極性をもった生き方をしようではないか。自立した、自らの生き方を見据えた、行動を進んで取っていかうではないか。そういうメッセージです。当面の勤め先が決まったら忘れてしまう、というのでは困ります。肝心なのは、これからの皆さん自身の人生です。大学を終えたのちにこそ、このメッセージに込められている精神が、発揮されなければなりません。

自立した判断と行動、というのは、自分勝手に人を慮ることなく傍若無人に突っ走る、
というのとはまったく違います。人は、文字通りの一人では生きていけません。人との関
係性のなかに、生きていかざるを得ません。これは、いわば否応なしに、誰しもが社会の
なかに生まれ育っているからでもあります。自分以外の人々との多様な関係性のなかで
生きていかざるをえないのが、人間存在そのものなのだ、ということです。少し硬い表現
をすれば、人間は類的存在以外ではありえない、ということです。さらに言えば、人間は、
人だけではない、さまざまな命のつながりのなかでしか、生きていけません。地球という
限りある世界のなかで、自然と豊かに関わる以外に、人間が存続していける可能性はあり
えないのです。

東日本大震災では、改めてその自然の力の壮絶さを認識させられ、人間の力の限界を知
らされました。あるいはまた、それを忘れた思い上がりや、いかに悲惨な状況を我々にも
たらしてしまいかねないのかを、知らされました。

また大震災では、流通が遮断されたり、各種の工場や施設が被災したことによって、思
わぬ形で生産が止まり、物不足が生じ、生活そのものがいかに困難を抱えるかを、経験し
ました。今でも被災地では、復興・回復が重い課題として目の前にあります。人々のさま
ざまな活動が結びついて初めて社会がうまく回転できるということ、そのなかで一人ひと
りの人生が可能になっているのだ、という、平時にあってはつい忘れてしまいがちな現実
に、改めて気づかされたのではないのでしょうか。すぐ目の前に見えるものに限られない、
その背後に折り重なるように存在している、さまざまな人たちによる多様な活動を、いつ
も忘れないようにすること。他の人たちのおかげなしに、一人で生きていくのごとくに
錯覚して、おごり高ぶらないこと。さまざまな働きに対して、常に想いを致して感謝の念
を持つことが必要なのだと、私は考えています。皆さんはどう考えるでしょうか。

多くの卒業生の皆さんにとっては、小学校以来、あるいは幼稚園以来、生活の基本的な
枠組みをなしてきたであろう学校教育の段階は、これで終わります。しかし、学ぶという
行為に、終わりはありません。皆さんのこれからの人生には、間違いなく、予期せぬこと
が多く生じるでしょう。全てが予定通りに進む人生など、面白くもないでしょうが、そも
そもありえないものです。とくに、グローバル化とか知識基盤社会への転換、といった表
現で繰り返し言われているように、これからの世界は、各地の結びつき、連関がいつそう
強まり、否応なしにさまざまな国や地域の人たちと接する機会が増えていくはずで
す。日本の内部にいたとしても、外から、人も物も、そして情報も、どんどん入ってくる時代で
す。そうした変化を、ポジティブにとらえて、人生を豊かに過ごしていくためには、これ
からもさまざまな学びを自ら進める姿勢が欠かせないということを、この新たな門出をし
るす大学卒業の時点で、再確認しておいてほしいと願います。

自然の大災害からの復興も、放射能汚染の恐怖からの脱却も、この先、長い年月を要す
るでしょう。皆さんの世代が軸になって、世の中を良くしていかなければなりません。さ
らにまた、目をこの地球世界全体に向けるなら、依然として課題は多くあり、たとえば南

スーダンでのように、難民も新たに多く生み出されてしまっているという、悲惨な現実があります。食べるもの、飲む水にも苦労している人たちが少なくないのが、21世紀になつてすでに10年を超えた、地球世界の現実です。問題も多い、あまりに多い、と言わなければなりません。しかしまた、そうしたなかでも、しなやかに生きていく知恵、あるいは、したたかに生き抜く技もまた、各地に存在している、そういう現実もありましょう。

問題に学び、生きる知恵に学ぶ、こうした学ぶという行為は、学校だけのものではありませんし、資格取得のためとか収入などの数字に直結するためだけのものではありません。ありとあらゆるところに、私たちが生きていく上での学ぶ素材は満ち満ちている、と日頃から私は考えています。皆さんご自身が、しなやかな感性を持った素敵な生き方をしている人だと、他の人たちから学びの対象になるような、そういう人生を築いてほしいと、心から願っています。学習院大学で学んだからには、それだけの素養は皆さんの身についているはずだと、私は確信しています。

以上、皆さんへの私の期待と希望をお伝えして、卒業式での学長告辞と致します。

平成24年3月20日

学習院大学 学長 福井憲彦